

はじめに

当研究室が発行する『一橋大学スポーツ研究』が、『研究年報』の時代からの通番で、今年付されたナンバーは「30」となった。記念としてこの30年間の蓄積を巻末に「総目次」として掲載しているのでご覧いただきたい。

1982年の『研究年報』第1号のテーマは「国民スポーツ研究の課題と方法」であった。その後、1983年「国民スポーツと主体形成」、1984年「国民スポーツ研究の展開」と、「国民スポーツ」をテーマとした共同研究が継続されている。この時代、わが国のスポーツの社会科学的研究は「体育社会学」や「体育史」の領域で行われていたが、80年代前半の共同研究のテーマや論考の内容をみると、「体育」という枠組ではとらえられないスポーツをめぐる社会現象やスポーツと社会の関係などを分析するための理論や方法を、諸外国のスポーツ研究から学びつつ模索していたということが理解できる（ちなみに「スポーツ史学会」の設立は1986年、「日本スポーツ社会学会」の設立は1991年。「スポーツ産業学会」は1989年に設立されている）。そこから一貫して、変化していく社会とスポーツのあり様を捕捉するための研究が継続され、1997年に初めて「グローバリゼーション」がテーマに入るようになった。

今号のテーマは「グローバルの過程とスポーツの変容」である。地球規模で人・モノ・カネ・情報が行き来し、地理的な隔たりを越えた地域どうし（それぞれの土地に住む人どうし、モノどうし、人とモノなど）が互いに結びつきあい、関係性を強化していくグローバリゼーションは、同時に、特定地域のアイデンティティの勃興や地域独自の伝統文化の復興などのローカリゼーションの過程でもある。本年3月11日に東日本を襲った大きな震災とその後の原発の問題は、われわれにローカルな生活世界というものがいかに他の地域の生活と結びついて成立しているのかということを実感させた（計画停電、ガソリンの供給不足、放射能の脅威、継続する円高……）。いっぽう、「なでしこ」、「サムライ・ブルー」といった日本的な呼び名を冠せられたスポーツ選手たちが世界の舞台で活躍する姿は、われわれに「日本人」としてのアイデンティティを感じさせてくれた。それらはグローバルな世界の特徴であろう。

われわれは震災後の大変な時代に生きている。そのような時代だからこそ、冷静に社会を研究する姿勢が大切になると思われる。われわれは、一橋のスポーツ研究の30年以上にわたる蓄積を大切にしつつ、さらに成果を積み上げられるよう今後も日々努力をしていきたいと考えている。

2011年9月13日

一橋大学スポーツ科学研究室室長 岡本 純也